

聖書と私の出会い——私の前半生

井田 泉

1 大学生時代まで

私が最初に聖書に触れたのはいつのことかはっきりしない。気がつくとき聖書があった。1950年、生まれた年の4月9日、イースターに日本基督教団膳所教会で幼児洗礼を受けた。幼稚園は大津市の中ノ庄にある聖愛幼稚園（キリスト教）に2年保育で入園した。礼拝で聖書のお話を聞いたはずだが、何も覚えていない。その後父の仕事の関係で何回か滋賀県内を転居した。近江八幡市に住んでいたとき、何回か日曜学校に行ったことがある。そのころから、多分母からもらって、小さな新約聖書を持っていた。小学6年生になるとき、再び大津市に戻り、膳所教会の日曜学校に通った。母に作ってもらった小さなかばんに、新約聖書とこどもさんびかを入れて道を歩いたことを覚えている。

クリスマスだったか、日曜学校から聖句の書かれた陶器製のプレートをもらった。それには「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」というヨハネ福音書（15:5）の言葉とぶどうの絵が描かれていた。それは長い間自分の机の上のほうにかけてあって、聖書の言葉はとても大事なものだ、素朴に思っていた。

中学、高校のころは、家から教会が遠かったこともあって、教会に行くのはクリスマスとイースターくらいだった。それでも幼い頃からの素朴な信仰は続いていて、まさかの時に頼りになるのは聖書だ、と思っていた。時折、聖書を開いて読んでいたと思う。高校2年のとき、胆嚢炎という病気になって、真夜中にひどく苦しかったとき、一心に神様の助けを求めて祈っていたことを思い出す。その頃、友人たちと同人雑誌をやっていた、その病気のことでそのときの自分の思いについて書いたことを覚えている。

大学入試のときは、その新約聖書をかばんに入れていた。一種のお守りのような役割を果たしていた面がある。何か大事なことがあるときには聖書を持って行くのが習慣になっていた。そのころまでに新約聖書はだいたい一通り読んでいたと思う。

自覚的にキリスト教を求めるようになったのは大学のときである。大学に入ったころから毎週教会に通うようになった。大学1年の秋に日本基督教団から日本聖公会大津聖マリア教会に移り、堅信を受けた。堅信は洗礼の次に受ける儀式で、主教さんに手を置いて祈っていただく礼拝である。洗礼と堅信を受けて教会の正式のメンバーになる。堅信の準備のとき、

牧師さんから旧約聖書の何か少し長いものを読んでみなさいと言われて、イザヤ書を読んだ。あまりよく分かったとは言えないが、何か迫力のあるものだと感じた。次のような言葉が記憶に残ったように思う。

「災いだ、家に家を連ね、畑に畑を加える者は。／お前たちは余地を残さぬまでに／この地を独り占めにしている。」 5:8

権力を持った階級が富を独占することに対する厳しい批判がある。聖書は社会正義を求めている、という印象はとても強かったように思う。

また次のような言葉もあった。

「『見よ、わたしを救われる神。／わたしは信頼して恐れない。／主こそわたしの力、わたしの歌／わたしの救いとなってくださった。』／あなたたちは喜びのうちに／救いの泉から水を汲む。」 12:2-3

神はわたしを救われる方。聖書の中には、一人の人間の魂の救いということと、社会の正義と平和ということと、両方を重んじている。いつの頃からかそのように意識するようになった。魂の救いのみを言って社会の平和と正義に関心がない、というのはおかしいと思ったし、反対に社会的な関心だけが強くて魂のことを軽んじるような立場にはついて行けないと思っていた。

当時は教会の青年会が盛んで、私も自然にそのメンバーになった。教会の聖書研究に出たり、青年会の聖書研究会などもよくやった。悩み多い時期であった。

堅信に際して教名をつけてもらうことになり、「ヨハネ」を希望してかなえられた。ヨハネ福音書の冒頭が好きだったせいもある。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」 1:1-4

いつのころからか聖書全体の中で一番好きだと思っている箇所があった。それもヨハネ福音書の言葉である。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」 3:16

大学のころ、私の心から離れない聖書の言葉があった。それはエレミヤ書第 12 章 1 節の言葉である（当時は日本聖書協会口語訳聖書で、今の新共同訳とは言葉が違うが、ここでは新共同訳で記す）。

「正しいのは、主よ、あなたです。／それでも、わたしはあなたと争い／裁きについて論じたい。／なぜ、神に逆らう者の道は栄え、／欺く者は皆、安穩に過ごしているのですか。」

エレミヤという若い預言者が、神様に訴えかけた言葉である。弱い立場の人が苦しめられる一方で、なぜ悪人が栄えているのか。これは、なぜ不幸なことが罪のない人に臨むのか、という問いともつながっている。このことをめぐって格闘しているのが、旧約聖書のヨブ記という書物である。ヨブという正しい、また極めて良心的な人が大きな不幸に見舞われ、苦しみがきながら神に向かって絶叫する、というものである。すべてを神の意思として納得するのではなくて、納得がいかないことをどこまでも神に向かって訴える。そういうヨブ記という書物が聖書に含まれていることを、私は自分も苦しみを味わった者として、ありがたく思っている。

人の魂の苦しみが救われる（あるいは支えられる）には二つの道があって、どちらも大切だ、と思う。一つは、自分の苦しみを分かってくれる、共感、共鳴してくれる存在が、一緒に重荷を担ってくれる存在がある、ということである。旧約聖書で言うとエレミヤ書、ヨブ記がこれに当たる。新約聖書のほうではどうか。

マタイによる福音書第9章に次のような箇所がある。

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、**深く憐れまれた。**」9:35-36

この「深く憐れまれた」と訳された元のギリシア語は「スプランクニゾマイ」という言葉で、「はらわたが焼ける」というニュアンスを持つ言葉である。人の苦しみの現実に触れて、自分の心も体も苦しんでうめく、というのが「スプランクニゾマイ」である。イエスはそのように、人の痛み、悲しみを自分のものとされた方であった。

その人の痛みを自分の痛みとされた究極の結末が、十字架である。その受難のイエスの姿を、苦難の僕の姿を、イエスより数百年前に描き出した預言者がいた。その預言はイザヤ書に含まれているが、イザヤとは別の、イザヤより後の時代の人で名前が分からないので、「第二イザヤ」と呼ばれている。

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたち

は思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。

彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎^{とが}のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。53:3-4」

後の受難のイエスの姿を、はるか以前から指し示している言葉である。旧約聖書はイエス以前に書かれたもので、イスラエル民族の歴史が中心になっている書物であるが、全体としてイエス・キリストを預言、予告したものとキリスト教では理解する。それに対して新約聖書は、イエス・キリスト以後に書かれたもので、預言の実現（成就）を証言したものである。

人の苦しみが救われるのは、一つはその苦しみを受けとめてくれるもの、共感、共鳴してくれるものの存在だ、という話から、イエスの話になり、第二イザヤの預言の話になった。話をもとに戻す。救いについてのもう一つの道というのは、人の苦しみを根底から励ましてくれる存在である。断乎たる救いの言葉、確固とした救いの宣言、というものが聖書にある。その典型的なものがやはり第二イザヤにある。

「わたしはあなたを固くとらえ／地の果て、その隅々から呼び出して言った。

あなたはわたしの僕／わたしはあなたを選び、決して見捨てない。

恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。

たじろぐな、わたしはあなたの神。

勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。」41:9-10

新約聖書ではどうだろうか。

「弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐ彼らと話し始めて、『安心しなさい。わたしだ。恐れることはない』と言われた。イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非常に驚いた。」マルコ 6:49-51

イエスが「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われる。イエスが生きておられる。その生きておられるイエスが私たちに「安心しなさい。わたしだ」「わたしがここにいる」と言われるのを聞くとき、私たちは恐れから解放される。

復活幼稚園（京都）の名前になっている「復活」というのは、イエスが「わたしが生きています。あなたとともにいる。大丈夫だ。安心しなさい」ということである。

今日の話は、大学時代までの私の聖書との出会いの物語で、後から整理すると、救いの二

つの道、という話になった。共感、共鳴して、一緒に重荷を担ってくれる存在ということと、断乎たる救いの宣言をしてくれる存在ということと、二つを話した。神の、イエス・キリストの救いは、また聖書の語るメッセージは、その両方にまたがっている、というのが今日の一応の結論である。

正直に言うと、復活ということの理解がはっきりしたのは大学卒業のころで、それに至るまでの聖書と救いをめぐる私の格闘は、非常に悩みの深いものであった。それについてはまた別の機会にお話ししたい。

2 同志社から神学校入学まで

大学生時代（大阪外国語大学朝鮮語学科）、わたしは信仰上の疑問に苦しんだ。幼いときからの素朴な信仰が土台から揺さぶられ、道を見出したいと切望していた。ちょうど学園紛争の時代であり、私は何かをしなければならない、しかし何もできない、というあせりと無力感に陥っていた。そうしたなかで、ドイツの哲学者カール・ヤスパース、ついでデンマークの思想家キルケゴールに触れ、強い影響を受けた。しかしなお、信仰の問題は解決できなかった。一番苦しんだのは「復活」ということであつた。キリスト教の信仰箇条のうち、天地創造から十字架の救いまでは受け入れられるように思った。しかしどうしても復活がわからなかった。どうして信じたいと願っている者の前に「復活」というつまずきを置くのか。復活がわからないことが耐えがたい苦痛であつた。3年生のとき、野尻湖畔で開かれた聖公会 SCM の「スタディ・カンファレンス」で主題講演者（当時新進気鋭の聖書学者）が「今どき、イエスの復活を本気で信じているような者は一人もいない」と言った。その言葉が自分の胸に突き刺さった。

大学を卒業する日が近づいたころのある日、大津から大阪への通学の途中、京阪電車の特急に乗っていた。高橋三郎という人の『キリスト信仰の本質』という本を読んでいて、その関連でルカによる福音書を開いた。イエスの十字架の後、二人の弟子がエマオという村へ行く途上の物語である。

「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、『歩きながら、やり取りしている

その話は何のことですか』と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。……」ルカ
24:13-17

ずっと読み進んで、やがてその見知らぬ人を家に迎え入れて、一緒に食事の席に着く。その人は「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」24:30-31

ここからは当時読んでいた日本聖書協会口語訳で引用する。

「彼らは互いに言った、『道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか。』」24:32

そこを読んだとき、私の心も熱くなった。何かが自分の中で燃えるような気がした。その熱いもの、暖かいものが、1日たっても2日たっても、1週間、ひと月たっても消えないで、静かに燃えていた。うれしかった。これが復活ということか。理論的に説明がついて納得したわけではない。しかし、復活したイエスが生きておられる、ということが事実として力をもってきて、私の中で燃えていた。

失望落胆してエルサレムを逃れた弟子たち。女の人たちが伝えてきたことを信じることができず、話し合い論じ合っていた弟子たち。その弟子たちを追うようにしてイエスが、イエスご自身が近づいて来られた。イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩き始められた。復活がわからないといって悩んでいる私に、イエスご自身が近づいてきて、一緒に歩いてくださった。わからない、苦しい、とつぶやいている私に耳を傾けていてくださった。その事実が先にあって、後からそれに気づいたということなのだ。私が気づくずっと前から、イエスの心が私のためにも燃えて、燃え続けていたのだと思う。

神が私たちを愛しておられるという事実が先にあって、それに後から気づく。このことを私は後に「存在は認識に先立つ」と表現するようになった。事実が存在する。これが一番重要なことである。たとえ私たちが神とその愛を知らず、あるいは疑うことがあったとしても、神の愛という事実はけっして揺るがない。

大学卒業後、同志社の大学院（神学研究科歴史神学専攻）に進んだ。卒論で扱った朝鮮キリスト教史をもう少し深めたいと思ったのである。牧師になることは全く考えていなかった。大学時代に神を一度見失って苦しい経験をしていたから、牧師というのは恐ろしい仕事だと感じていた。信徒であれば、神を見失っても自分一人のことで済むが、牧師になって神を見失えば、自分のみならず人をも滅びに巻き込んでしまう、という気がしていた。「自分は牧師にならない、なれない」と固く決意していた。

大学1年の時から教会にずっと毎週通っていたが、教会で私の悩みがあった。それは説教である。多くの時事問題が語られ、多くの神学者の話が登場するのだが、聖書のメッセージの周辺をぐるぐる回っている感じで、それがその日の聖書の箇所とどう関係するのかわからなかった。神を見失って苦しんでいる私に、その説教は何も語りかけてくれなかった。「私が聞きたいのはそういう話ではない」という内心の叫びがあった。生きておられる神の生きた言葉があるはずではないか。友人の教会に出席したりして、かろうじて心の渇きを癒していた。

「見よ、その日が来ればと／主なる神は言われる。／わたしは大地に飢えを送る。／それはパンに飢えることでもなく／水に渇くことでもなく／主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きだ。／人々は海から海へと巡り／北から東へとよろめき歩いて／主の言葉を探し求めるが／見出すことはできない。」アモス 8:11-12

このような言葉は自分たちと無関係とは思えなかった。

アモス書の中には印象的な言葉がある。

「まことに、主はイスラエルにこう言われる。

わたしを求めよ、そして生きよ。」5:4

これは神ご自身の呼びかけであるが、それを受けとめたアモスが自分の言葉として言い直して、人々に呼びかける言葉もある。

「主を求めよ、そして生きよ。」5:6

神は私たちに、神を求めて生きることを呼びかけられる。生きることへの促しと励まし。これが聖書のメッセージである。

大学院2年目の夏、初めて韓国を1週間旅行した。韓国の教会の一端に触れて強烈な印象を受けた。困難の中で神様だけに頼って生きている人々の信仰の切実さに心を動かされた。そのころから、私の心の奥底のほうで、「牧師」「聖職」ということがなぜか気になりだした。「牧師にならない」決意をしているのに、何かそちらへと心が引かれる気がするのである。それは月日が経つに従って抗しがたい力となってきたので、それを抑えるのにひどく苦しみを覚えるようになった。旧約聖書のイザヤ、エレミヤといった人々の召命（神に仕える者として神から呼び出されること。イザヤ書第6章、エレミヤ書第1章）の物語を読むととても感動した。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。……わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるとこ

ろに、わたしに仕える者もいることになる。」ヨハネ 12:24-26

「一粒の麦……」とはイエスがご自身の死のことを言われたものだが、こんな言葉が私の心に強く響き、たとえ牧師にならなくても神に命を献げるしかないという思いが強くなった。何人かの人に、自分の進むべき道について相談した。ある牧師が私のために「この兄弟をみもとに引き寄せてください」と祈ってくださったことは忘れられない。

そしてある日、出エジプト記第3章、4章を読んだ。モーセの召命物語である。

「モーセは、しゅうとでありミディアンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに来た。そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。モーセは言った。『道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。』

主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、『モーセよ、モーセよ』と言われた。彼が、『はい』と答えると、神が言われた。『ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。』神は続けて言われた。『わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

主は言われた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。……今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。』

モーセは神に言った。『わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。』

神は言われた。『わたしは必ずあなたと共にいる。……』」出エジプト記 3:1-12

……

「それでもなお、モーセは主に言った。『ああ、主よ。わたしはもともと弁が立つ方ではありません。あなたが僕にお言葉をかけてくださった今でもやはりそうです。全くわたしは口が重く、舌の重い者なのです。』」

これは私の思いそのものであった。

「主は彼に言われた。『一体、誰が人間に口を与えたのか。一体、誰が口を利けないようにし、耳を聞こえないようにし、目を見えるようにし、また見えなくするのか。主なる

わたしではないか。さあ、行くがよい。このわたしがあなたの口と共にあって、あなたが語るべきことを教えよう。』モーセは、なおも言った。『ああ主よ。どうぞ、だれかほかの人を見つけてお遣わしてください。』

主はついに、モーセに向かって怒りを発して言われた。……」出エジプト記 4:10-14

いつまでも尻込みするモーセに、ついに神は怒りを発せられた。ここまで読んだとき、もう限界だと思った。神は私を叱りつけられる。ついに私は神に降伏した。これ以上迷っていたら、身が持たないと思った。

大津聖マリア教会から聖職志願を出し、まもなく京都教区主教から聖職候補生として認可を受けた。

「主よ おわりまで つかえまつらん／みそば 離れず おらせたまえ

世のたたかいは はげしくとも /み旗のもとに おらせたまえ

……

主よ 今ここに 誓いをたて しもべとなりて つかえまつる

世にあるかぎり この心を／つねにかかわらず 持たせたまえ」古今聖歌集 437

翌年 4 月、東京の聖公会神学院に入学した（3 年制、2 年編入）。25 歳だった。神は私を強制的にそこへ連れて行かれた。

3 神学校時代

1975 年 4 月、「神が私をこの道に導かれた」という強い召命感と気負いを持って、私は東京の聖公会神学院に入学した。だが神学生の生活は辛いものであった。授業はあまり面白くなかった。教科は厳しく、寝不足と体調不良に悩まされた。人間関係にも気を遣った。初めて親元を離れた緊張もあった。

その年の夏休み、帰省して、未提出だった同志社の修士論文（題「初期朝鮮キリスト教史研究」）を何とか仕上げ提出した。「論文」という、数年にわたる緊張と重圧感から解放され、やれやれと思った。ところがしばらくすると、どういうわけかひどい鬱^{うつ}状態に陥った。鬱状態が続く中で、聖書の言葉が自分の中で響かなくなった。あれほど感動を持って読んでいた聖書が、なにか疎遠なものとなり、自分とは関係のない遠い話としか感じられなくなった。神の存在と働きを実感できない、ということがひどく苦しかった。新学期が始まり、神

学院に戻って後もその状態から回復しなかった。再び私は神を見失ったのである。私の中で燃えていた「復活」も感じられなくなった。

大学時代の苦しみより今回の方がはるかに深刻だった。以前は苦しくてもそれは自分個人の苦しみだった。しかし今回は違う。教区から聖職候補生として認可され、学費・寮費も教区から出してもらって、聖職となるために神学校に送られてきたのである。教区の人々に会わせる顔がない。自分の人生はこれで終るのだろうか、本気で思った。

時折、非常な不安と焦燥感が襲ってきて、じっとしていられなくなる。ある晩、そのような状態にまた襲われたとき、救いを求めて祈祷書（当時は文語）を取り、巻末の詩編を開いて声を出して読み始めた。偶然に開いたのは第 77 編であった。当時の文語で引用する。

「われ声をあげて神によばわん われ声を神にあげなば聞きたまわん
われ悩みの日に主をたずね、夜わが手をのべてたゆむことなかりき わが魂は慰めらるる
をこばみたり」 77:1-2

激しい悩みするとき、この詩人は慰められるのを拒んだという。そうだと思った。安易な慰めは助けにならない。そのとき、声を出して詩編 77 編から読み出して、1 時間以上読んだだろうか。読み疲れた。けれども詩編は、神を見失った者にも支えを与えてくれるように感じた。

帰省中のある日、聖書と水筒だけを持って比叡山の一角（琵琶湖側）、壺笠山（明智光秀の女婿、明智秀満—左馬介光春とも呼ばれる—が戦いに破れて自害したとされる山。めったに人は入らない）に登り、神を呼んだ。呼んだが答えはなかった。しかし山を下りるときなぜか聖歌 455 番が浮かんで来て、歌っていた。

「とくわがやに帰れと 主の呼びたもうに
などで愛の光を 避けつつさまよう
帰れやわがやに 帰れやと 主はいま呼びたもう
……
いまみもとに来よかし 主は待ちたまえり
罪もとがもあるまま ためらわで来よ
帰れや……」

鬱と不信仰の状態は容易に解決しなかった。ドイツの神学者ボンヘッフアーの『誘惑』という本を読み、この人は私の悩みを分かってくれると思った。イエスが荒野で受けられたの

は（マタイ 4:1-11）、ぎりぎりの瀬戸際の誘惑であったことを教えられた。

「イエスもまた誘惑においてご自分の力をすべて奪われ、神と人間とから見捨てられてただひとりになれ、サタンの強奪を不安の中で忍ばなければならず、彼はまったくの暗黒の中につき落とされる。彼には、彼を固くとらえ、彼にかわって戦い、勝利するところの助け・守り・支える神の言葉以外に何も残っていない。」（『誘惑』から）

人を（私を）神から引き離して滅ぼそうとする「悪魔」が私にとって大きな問題となった。

私には信仰がない。信じたい気持ちはあるが信じて安心することができない。このような自分がそれでもなお救われるとすれば、それは自分の信仰によってではなく、神ご自身の主権的な働き（恵み）によるしかない、と思った。「信仰」という言葉がいやだった。

ローマの信徒への手紙（3:22）、ガラテヤの信徒への手紙（2:16）に「イエス・キリストへの信仰によって義とされる」という言葉がある。「義とされる」とは、神の目から見て正しい者と認められ、受け入れられることで、「救われる」とことと根本的に同じである。人の救いは行いによるのではなく、信仰によるのだという大切なところである。けれどもその信仰が頼りなければどうなるのだろうか。ところがこの「イエス・キリストへの信仰によって」と訳されている言葉は、「イエス・キリストの真実によって」とも訳することができることを知った。私の信仰によってではなく、イエス・キリストご自身の真実によって救われる。イエス・キリストが神に対する真実と私たちに対する真実を貫いて生きて死んでくださった。そのことによって、私たちは救われる。この解釈がよい。これしかない、と思った。人の（私の）救いは「神の主権的な働き」（恵み）による。そうでなければ自分は救われなかった。

もう一つ、神学生時代に大切に思ったことがある。それは聖書の「証言」ということである。自分には神がわからない。救いが実感できない。しかし、だからと言って神の恵みを喜び歌っている人たちの言葉を偽りとするのは傲慢だと思った。

「わたしの魂は主をあがめ、／わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

身分の低い、この主のはしために（も——注「も」は原文にはなく、誤訳だと思う）／目を留めてくださったからです。」ルカ 1:47-48

このように喜び歌うマリアには、彼女をそう喜び歌わせずにはおかない何か（神の働き）があったのに違いない。マリアは神との出会いをこのように証言しているのだ。聖書は、そのような神と人の出会いの出来事についての証言の集大成である。そのような証言を一つ一

つ確かめるまでは諦めることはできない、死ぬことはできない、と思った。

またこういうこともあった。カール・バルトという人の説教を読んでいて、次のような聖書の言葉に出会った。

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。」エレミヤ 31:3（聖書協会口語訳）

（そうは言われても、あなたの存在がわからないのです。）

わたしの心はそうつぶやいた。

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。」

（でもあなたの愛を感じることはできません。）

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。」

（「あなたを愛している」と言われるのであれば、どうしてわたしをこんなままに放置されるのですか。）

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。」

10回問えば11回目の言葉が返ってくる。100回尋ねれば101回、その同じ答えが返ってくる。そのように感じた。

「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。」

神の愛を実感することはできないけれども、この聖書からの呼びかけによって、不安の中で私は慰められた。神を実感することはできなかったが、それでもなお聖書の言葉に支えられるという具合であった。

同志社時代から、私はこのカール・バルトというスイスの神学者の強い影響を受けていたが、神学生の時代にもこの人は私の支えとなってくれた。次のような言葉に叱責され、また慰められた。

「真剣な問いとはとはこうである。自分の領域の中に起こる神のわざ、神の言葉、そして自分の領域の中にも生きている霊の力を指し示されておりながら、なおこの味気ない『わたくしには信仰が欠けている！』というようなことに固執することを自分に許し、なお固執することができるであろうか？ すなわち自分自身の不信仰に媚^{こび}を呈することなどはやめてしまって、自分にも知らされ、自分にも与えられた自由に中に生きようとするのではないか。……」（『福音主義神学入門』）

ある日曜日、無教会（内村鑑三の流れ）の高橋三郎先生の集会に行った。その日の聖書講義は、ヘブライ人への手紙第6章についてであった。

「神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。」 6:10

神は覚えていてくださる。その日の聖書講義の内容は忘れてしまったが、この聖書の言葉は心に焼きついた。自分が話す際も、人の言葉は忘れられてよい、ただ聖書の言葉が残ればよい、とそのように思うようになった。

神学生のときは渋谷聖ミカエル教会に通った。「神が分からない」と言いながらも、礼拝の役割（日課朗読やサーバー——聖餐式で司祭の補助をする者。「侍者」ともいう）を持ち、また聖書輪読会などをやった。輪読会は青年を中心にして、創世記の初めから読み始めた。毎回 30 分間輪読し、疲れてコーヒーを飲み、その後自由に感想を出し合った。たくさんの青年が集まり、みんなよくしゃべった。私も聖書の自分なりの受けとめを率直に話した。不思議に幸せな気持にもなった。

聖公会神学院を卒業する少し前、同級生数人で水戸に行った。日曜日、水戸聖ステパノ教会に出席した。当日の福音書はルカ 18:35-43 だった。青木春生司祭の説教を聞いた。エリコの町の近くの道端で、座って物乞いをしていたある盲人の話である。イエスが通られると聞くと彼は、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んだ。

「先に行く人々が叱りつけて黙らせようとしたが、ますます、『ダビデの子よ、わたしを憐れんでください』と叫び続けた。イエスは立ち止まって、盲人をそばに連れて来るように命じられた。彼が近づくと、イエスはお尋ねになった。『何をしてほしいのか。』盲人は、「主よ、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた。

『見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。』盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従った。これを見た民衆は、こぞって神を賛美した。」

「主よ、目が見えるようになりたいのです。私も見えるようになりたいのです。はっきりとあなた（主イエス）を見ることができるようになりたいのです。」この盲人は、神とイエスを見失っている自分のことだと思って、聞きながら涙が止まらなかった。

こうして2年間の神学校の生活が終わった。卒業までに信仰の問題を解決させてください、と祈ったが聞かれなかった。学校からチューター（助手）になってはどの話があり、教会に出る前にせめてもう1年ここに留まりたいと願ったが、教区から許されなかった。

1977年春、「不信仰の爆弾を抱えたまま」（当時の思い）下鴨キリスト教会・下鴨幼稚園に赴任した。神が生きておられるなら、どんなことがあっても大丈夫だろう、もしそうでなければ人生は終わりだ、と思った。27歳だった。

4 下鴨キリスト教会時代

1977年4月から下鴨キリスト教会での生活が始まった。最初の礼拝のとき、「私は神様がわからないという不信仰を抱えています。こんな私でも受け入れていただけるのであれば、ご一緒に聖書を読んで歩んで行きたいと思います」と挨拶した。神様が分からないと言っている者が説教を月に2回し、牧会する。矛盾であるがどうしようもない。学生時代の「復活経験」のようなことが起こればと、時には期待したがそういうことは起こらなかった。

大変だったのは幼稚園である。長年勤めた主任が辞められた後で、2年目の先生が2人、新任の先生が1人、それに私である。園長は大きな行事の時にしか来られない。会計は信徒の方が奉仕してくださるが、事務全般は主事である私の担当。全く幼稚園のことがわからない自分が園長的なこともやらなくてはならない。ひどいと思ったがその現実を受け入れるしかなかった。先生たちも私も必死だった。

何度も述べるが私には信仰の確信がなかった。たとえて言えば私には1月分の信仰や1週間分の信仰はなかった。「ただ1日1日を生かしてください。神様の働きをするために、この日1日分だけの信仰を与えてください」と毎日祈り求めた。旧約聖書出エジプト記のマナの話が私にとっては切実であった。

エジプトを脱出したイスラエルの民の約束の地への旅路は非常に厳しいものであった。外敵の襲来、内部の分裂、飢えと渇き。民はモーセに向かって不平を言う。

『イスラエルの人々は彼らに言った。『我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。』

主はモーセに言われた。『見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の

二倍になっている。』

.....

見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。『これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。』

.....

そこで、彼らは朝ごとにそれぞれ必要な分を集めた。日が高くなると、それは溶けてしまった。

.....

イスラエルの家では、それをマナと名付けた。それは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした。』出エジプト記 16:1-31

このようにイスラエルの民は、その日の糧をその日、その朝ごとに受けて歩いたのである。私も、その日1日を生きて働くだけの信仰を祈り求め、それをその日ごとに神からいただいて、かろうじて務めを果たしていた。主の祈りの「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」は切実な祈りであった。

慣れない事務に時間を取られて、説教や聖書研究の準備をする時間がろくになかった。毎日がぎりぎりだった。補助金、調査、共済.....。茶色の封筒が届くと恐怖だった。それでも確かに、神は私を日ごとに支えていてくださったのだ。

2年目の秋に結婚し、また12月に執事（聖公会では主教、司祭、執事が聖職であり、公的な場ではカラーをつける）に按手された。神を見失っていた自分が聖職になったのは奇跡だと思った。生活も少しずつ落ち着いていった。教会の人々が祈っていてくださったのだと思う。学生時代の「復活経験」のようなはっきりした経験は与えられなかったが、信仰をめぐる苦しみも徐々に徐々に癒され、元気が回復していった。

教区の夏の中学生キャンプを何年か担当した。ある年は創世記のヨセフ物語を取り上げた。兄弟たちに恨まれたヨセフがエジプトに売られ、やがてエジプト全国を治める者となり、飢饉のため食糧を買いに来た兄たちと再会する物語である。ヨセフがファラオの前に立って安定した地位を得たのは30歳であったという（創世記 41:46）。そのとき私も30歳、自分も長い信仰の苦しみした後、ようやく安定を与えられたように思った。ヨセフ物語の結末で、彼が兄たちに次のように言うところがある。

「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。」50:20

またパウロの手紙にはこのような言葉がある。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」ローマ 8:28

神が私に対しても、これまでのこと一切を益としてくださったのだと思った。

聖公会はカトリックとプロテスタントの中間に位置する教会である。宗教改革を行ったが、ローマ・カトリックと共通する伝統も受け継いでいる。「聖公会の立場はこうだ」というようなはっきりしたものが少ない。ある意味でいいかげんな教会だが、それだけ幅広い立場を包容できるとも言える。私自身は長い間「自分はプロテスタントだ」と自覚していた。カトリックの聖母マリア崇敬や教皇の無謬性の教理などはとんでもない間違いだと思っていた。関心は「み言葉」に集中し、「教会論」や「聖餐論」への関心は相対的に少なかった。神学校でもそういう点を指摘されたが、「それで何が悪い！」と居直っていた。

そのような私の偏りを憂えてか、司祭按手への準備として「聖餐論」を課題とするように教区から指示された。ウィリアム・テンプル（カンタベリー大主教——英国教会の代表者、全世界の聖公会の象徴的中心。ローマ・カトリックの「教皇」の場合と違い、世界の聖公会に対する命令権は持たない）という人の聖餐論を読むように言われたので、それに取り組んだ。そうして次第にそれまで以上に聖餐式の重要性を知らされていった。

執事按手から1年弱、1979年11月22日、司祭に按手された。司祭になってはじめて聖餐式の司式（執行）が許される（司祭には「パンとぶどう酒の聖別」「罪の赦し」「祝福」の権限が与えられる）。

「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。……この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」ルカ 22:19-20

司祭となって、自分で聖餐式を司式していて毎回感動した。イエス・キリストの臨在（そこにキリストが現実存在すること）を感じるのである。創世記第28章にヤコブが野宿して夢を見る話がある。天まで達するはしがが地に向かって伸びており、天使たちがそれを上ったり下ったりしていた。夢の中で彼は神の声を聞く。そしてヤコブは眠りから覚めてこう言う。

「まことに主がここにおられるのに、わたしは知らなかった。」28:16

これが聖餐式についての、そのころの私の思いであった。

教会の聖書研究会や婦人会では、マルコによる福音書、ヨハネの黙示録、エレミヤ書などを連続して読んだ。マルコ福音書の中で一番印象に残っているのは、第9章のイエスの山上での変容話の話である。イエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人だけを連れて高い山に登られたとき、彼らの前でイエスの姿が変わり、服が真っ白に輝いた。そのとき、旧約聖書を代表する二人の人物、モーセとエリヤが現れて、イエスと語り合っていた。

「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。」マルコ9:7-8

「ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。」

今までもイエスに従ってきたのだが、3人の弟子たちはこの時、あらためてはっきりと「イエスが一緒におられる」という事実のかけがえのなさを知ったのである。イエスがともにおられる。何がどうなろうとこのイエスにどこまでもついて行こう、と彼らは決心した。イエスが私たちとともにいてくださるといふことの慰めと力を教えられた。

エレミヤ書は、預言者エレミヤが人間としての弱さをさらけ出してうめき訴えている姿を映し出している。神の情熱の火に焼かれるようにして(20:9)、エレミヤは人々に語った。そのために彼は迫害を受ける。

「あなたはご存じのほずです。主よ、わたしを思い起こし、わたしを顧み、わたしを迫害する者に復讐してください。いつまでも怒りを抑えて、わたしが取り去られるようなことがないようにしてください。わたしがあなたのゆえに、辱めに耐えているのを知ってください。」

あなたの御言葉が見いだされたとき、わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり、わたしの心は喜び躍りました。万軍の神、主よ。わたしはあなたの御名をもって呼ばれている者です。

……なぜ、わたしの痛みはやむことなく、わたしの傷は重くて、いえないのですか。あなたはわたしを裏切り、当てにならない流れのようになられました。」エレミヤ15:15-18

エレミヤ書を読むと、エレミヤが神と人々に献げた「真実」というものが迫ってくる。イザヤ、エレミヤ、エゼキエルはいずれも私に大きな影響を与えたが、心情的に一番共鳴するのはエレミヤである。

そのころ、韓国の元大統領選挙候補、^{キムデジュン}金大中氏（後、大統領）が拉致され、死刑の危機にあった。日本で救援運動が起こり、私も京都市内の有志と共にこれに参加した。黒のキャソック（礼拝用の服）を着たままでデモに加わったりもした。

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を負わせる宣告文を記す者は。
彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、
やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」イザヤ 10:1-2

「彼は弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。
……正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」イザヤ 11:4-5

このような言葉に励まされた。金大中氏は国際世論の高まりもあって、やがて自由の身となる。

下鴨に来て5年目、自分の祈りが十分でない気がしていた。牧師に任命されて（日本聖公会では、司祭が教会に派遣されてその責任者となった場合に「牧師」と呼ぶ）責任が重くなり、疲れも感じていた。

「イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、『主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください』と言った。そこで、イエスは言われた。『祈るときには、こう言いなさい。“父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。……”』」ルカ11:1-2

祈ることをイエスに学びたい。毎日唱えている「主の祈り」をもっと深く祈りたい。そう思って、主の祈りについての連続説教を始めた。ヘルムート・ティーリケという人の「主の祈り」の説教集に導かれるようにして回を重ねていった。ティーリケの本に書かれていた「父（神）の心は子のために脈打っている」という言葉を今も鮮明に覚えている。10 数回の説教はまとめられて、下鴨キリスト教会から出版された。

その年の暮れ、思いがけないことが起こった。立教大学文学部キリスト教学科の助手になるようにとの話である。神学校時代の恩師が動いてくださっていることを知った。成り行きに（信仰的に言えば、神の御心に）任せようと思った。辞退しなかったため、話は次第に進展し、本決まりとなった。1982年春、東京に転居した。32歳だった。

（これは個人誌「アリエル」153号〔2002年9月〕から167号〔2004年秋〕の間に掲載したものです。いずれ時が来れば、その続きを書くつもりです。）